

4. 実現に向けた課題と今後の取組み

横浜市インナーハーバー検討委員会では、これまでに記載した「都心臨海部・インナーハーバー整備構想」に関する提言内容に加えて、提言内容とその実現に関する課題・今後取り組むべきことなどについて、各委員の意見を集約すると次のようになります。

構想の内容に関して

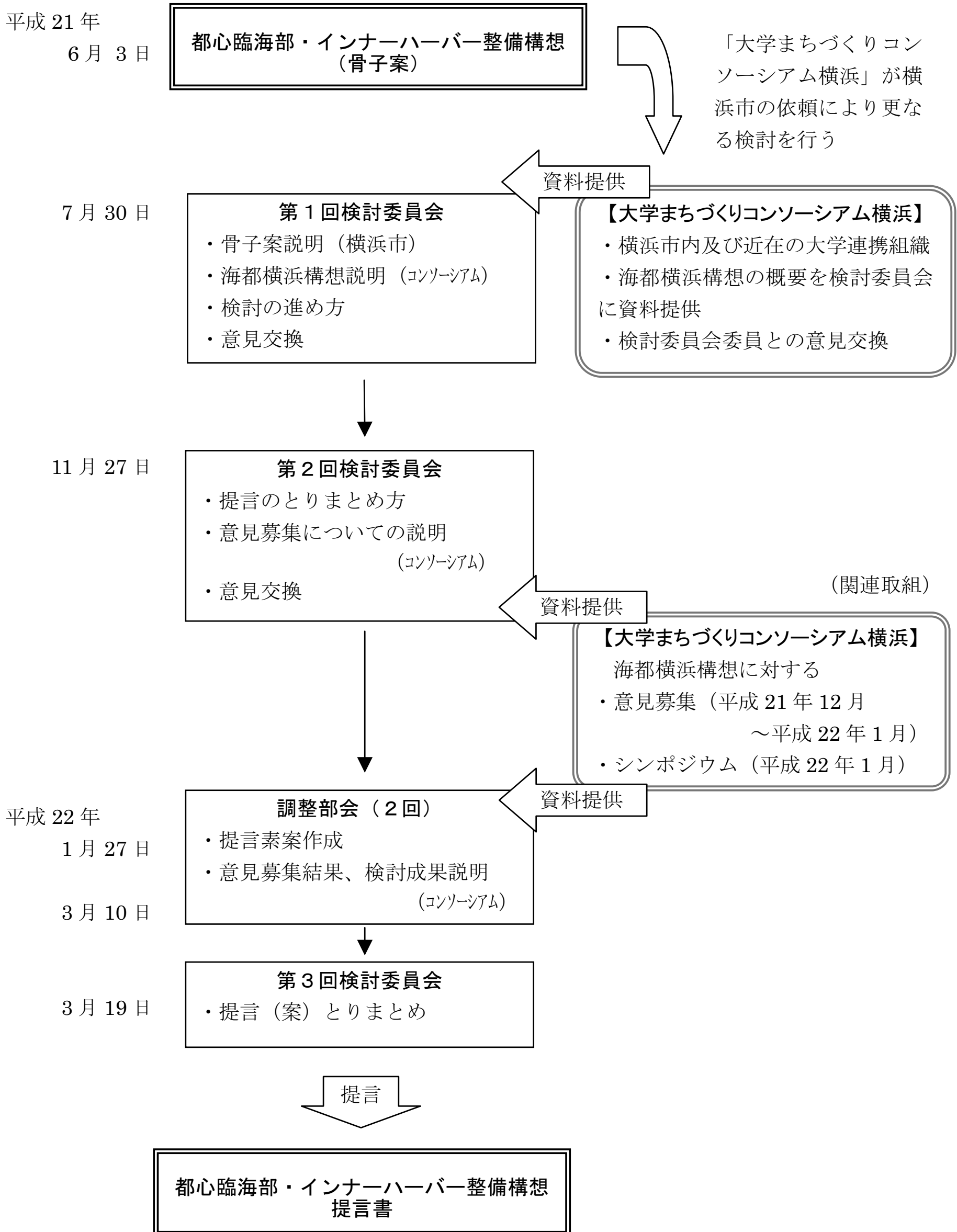
- ・ 地区の中心に位置する瑞穂ふ頭を、構想の象徴的な地区と捉え、海に囲まれた特徴的な地形を活かした親水性の高い場所への転換を進めるべきである。そのためには、ふ頭に残る米軍施設の早期返還へ向けて、国及び関係機関に働きかけていくことが重要である。
- ・ 高機能で効率の高い国際ハブ港化や京浜3港の連携などの検討を踏まえ、50年後の港湾機能の在り方とインナーハーバー地区の在り方を、併せて検討していくことが重要である。
- ・ 将来インナーハーバー地区の港湾機能が都市機能へと転換することが予想されているが、具体的にどのような都市施設を設置していくのか、あるいはどのように港湾機能を外縁部に展開していくかについては、今後検討すべき課題となっている。
- ・ 港湾施設などの機能転換を図る上で、開港以来の港の歴史を残していくことが重要である。
- ・ 多種多様な産業分野の中から、発展を目指す新たな産業分野として先ず何を選択すべきかを考える必要がある。まずは、今後の成長が見込まれる創造的産業の積極的集積を図り、雇用の拡大、人材の交流を促進することも重要である。
- ・ リング状の交通やエネルギーネットワークなどについては、段階的な整備が必要である。したがって、リング状に都市基盤が連結していない状況であっても機能する柔軟な都市づくりを進めることが重要である。
- ・ 高速道路網や幹線道路網などの体系的な道路ネットワークを形成することで、郊外部とのつながりを強化するとともに、地区内での過度な自動車交通を抑制することも重要である。
- ・ 市民に愛され、国際的にも発信性をもつ地区となるためには、市民との協働による緑の総量と質の維持・向上、下水処理をはじめとする更なる水質の改善、自然的・歴史的特色を活かした優れた景観形成などについて、より具体的な仕組みの導入を検討することが重要である。

構想の実現へ向けたプロセス、体制、しくみの構築などについて

- ・ 50年後が遠い将来と捉えられ、市民意識が希薄になりがちである。構想の市民理解をすすめるとともに、50年後がすぐそこにある自分たちの未来であることを、どのように市民が意識し、担い手となる子どもたちと共に考えて行けるかが重要である。
- ・ 構想を実現するための、組織、仕組み、法制度などが存在していないため、検討することが必要である。
- ・ 各都市計画や港湾計画などの法定計画を決定・見直す際は、構想で描かれる50年後の都市像を見据えて検討を進めることが望ましい。
- ・ 構想の実現を継続的に推進するための先行的な取組が必要である。そこでまずは、山下ふ頭の再編整備に向けた具体的検討の着手や、「エキサイトよこはま22（横浜駅周辺大改造計画）」の推進強化、関内・関外地区の活性化等を進め、整合性を図ることが重要である。
- ・ 今回の大学まちづくりコンソーシアム横浜における研究結果を踏まえ、引き続き専門家の見地から検証、政策提言していくことのできる体制をつくることが望ましい。

5. その他

5 1. 検討経過



5 2. 検討体制

横浜市インナーハーバー検討委員会 委員名簿

氏名	所属及び役職
布施 勉	(委員長) 横浜市立大学学長
藤木 幸太	(副委員長) 横浜港運協会副会長
北沢 猛 (平成 21 年 12 月まで)	(副委員長) 東京大学大学院教授
梅川 智也	財団法人日本交通公社研究調査部長
大矢 和子	株式会社資生堂常勤監査役
岡部 明子	千葉大学准教授
北山 恒	横浜国立大学大学院教授
近澤 弘明	中法人会会長
久野 敦子	セゾン文化財団 プログラム・ディレクター
横内 憲久	日本大学教授
若林 朋子	企業メセナ協議会 シニアプログラムオフィサー

(調整部会)

氏名	所属及び役職
北山 恒	(部会長) 横浜国立大学大学院教授
久野 敦子	セゾン文化財団 プログラム・ディレクター
藤木 幸太	横浜港運協会副会長

オブザーバー

鈴木 伸治	大学まちづくりコンソーシアム横浜委員長 横浜市立大学准教授
-------	----------------------------------

(委員長・副委員長・部会長以外は 50 音順)



1966年頃のインナーハーバー

撮影 アマノスタジオ